



非小細胞肺癌患者の「がん悪液質」の改善が 長期生存につながる可能性

～前向き臨床研究「SPIRAL-ANA」で新たな治療目標を提案～

本研究成果のポイント

- がん悪液質（食欲低下や体重減少、筋力低下など）は、非小細胞肺癌患者の治療効果や寿命に大きく影響する重要な病態です。
- 全国 29 施設で実施した前向き臨床研究により、がん悪液質治療薬「アナモレリン」を使用した患者の約 7 割で、治療開始から 12 週間後の時点で悪液質の改善が認められました。
- 悪液質が改善した患者は、改善しなかった患者よりも長く生存しており、「悪液質を改善すること」が患者の予後改善につながる可能性が示されました。

京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 助教（研究当時） 森本健司、同教授 高山浩一、同 客員講師 内野順治らの研究グループは、進行非小細胞肺癌に「がん悪液質」を合併した患者を対象に、がん悪液質治療薬アナモレリンを複合免疫療法（細胞障害性抗癌薬＋免疫チェックポイント阻害薬）と併用した前向き多施設共同研究（SPIRAL-ANA）を実施し、本件に関する論文が、科学雑誌『Journal of Cachexia, Sarcopenia and Muscle』に 2026 年 7 月 7 日付けで掲載されましたのでお知らせします。

本研究は、アナモレリンが、腫瘍そのものの進行を直接遅らせる効果は明確には確認されなかったものの、多くの患者で悪液質が改善し、その改善が長期生存と強く関連することを初めて前向き研究で明らかにしました。

本研究成果は、これまで「支持療法」と考えられてきたがん悪液質治療が、患者の予後にも関わる重要な治療である可能性を示すものとして期待されます。

【論文基礎情報】

掲載誌 情報	雑誌名 Journal of Cachexia, Sarcopenia and Muscle 発表媒体 ☒ オンライン速報版 ☐ ペーパー発行 ☐ その他 雑誌の発行元国 英国 オンライン閲覧 可 (URL) https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/jcsm.70340 掲載日 2026 年 7 月 7 日
	論文 情報
	論文タイトル（英・日） A Prospective Observational Study of Anamorelin During Chemoimmunotherapy in Non-Small Cell Lung Cancer with Cachexia (SPIRAL-ANA)

	(日本語:悪液質を有する非小細胞肺癌患者における化学免疫療法中のアナモレリンに関する前向き観察研究 (SPIRAL-ANA 研究)) 筆頭著者 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 (研究当時) 森本健司 代表著者 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 高山浩一 共同著者 医療法人徳洲会湘南藤沢徳洲会病院 呼吸器内科 日比野真 関西医科大学附属病院 呼吸器腫瘍内科 竹安優貴 神戸低侵襲がん医療センター 呼吸器腫瘍内科 山本 賢 JCHO京都鞍馬口医療センター 呼吸器内科 森本吉恵 宇治徳洲会病院 呼吸器内科 千原佑介 市立福知山市民病院 呼吸器内科 中野貴之 大阪公立大学医学部附属病院 臨床腫瘍学 金田裕靖 京都第一赤十字病院 呼吸器内科 田中駿也 佐賀大学医学部附属病院 呼吸器内科 小楠真典 藤田医科大学病院 呼吸器内科 後藤康洋 京都大学医学部附属病院 呼吸器内科 野溝 岳 和泉市立総合医療センター 腫瘍内科 大田隆代 独立行政法人国立病院機構姫路医療センター 呼吸器内科 塚本宏壮 市立大津市民病院 呼吸器内科 竹村佳純 独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター 呼吸器内科 中富克己 金沢大学附属病院 呼吸器内科 木場隼人 飯塚病院 呼吸器内科 吉峯晃平 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 山田忠明
研究 情報	研究課題名 アナモレリン投与が非小細胞肺癌患者への複合免疫療法に与える影響の検討 代表研究者 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 高山浩一 共同研究者 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 内野順治 京都府立医科大学大学院医学研究科 呼吸器内科学 (研究当時) 森本健司 資金的関与 (獲得資金等) 小野薬品工業株式会社

【論文概要】

1 研究分野の背景や問題点

進行非小細胞肺癌では、多くの患者が「がん悪液質」と呼ばれる状態になります。がん悪液質とは、食欲が低下し、体重や筋肉が減少して体力が落ちる病態です。悪液質になると、抗癌剤治療を継続することが難しくなるだけでなく、寿命にも大きく影響することが知られています。

日本では、がん悪液質に対する治療薬としてアナモレリンが使用されていますが、悪液質を改善することで複合免疫療法の治療成績（無増悪生存期間）および全生存期間が延びるのかは明らかになっていませんでした。

2 研究内容・成果の要点

本研究では、全国 29 施設から 123 人のがん悪液質状態にある進行非小細胞肺癌患者が登録され、そのうち 114 人を対象に解析を行いました。患者は非小細胞肺癌に対する複合免疫療法に加えて、アナモレリンを服用しました。

無増悪生存期間中央値は 6.2 ヶ月、全生存期間中央値は 18.5 ヶ月でした(図 1)。無増悪生存期間の延長は明確には確認できませんでしたが、全生存期間中央値は、悪液質患者を対象としたこれまでの報告と比べて良好な成績でした。

また、治療開始してから 12 週間後の時点で 71.8% の患者で悪液質が改善していました。さらに、悪液質が改善した患者は、改善しなかった患者に比べて全生存期間が明らかに長いことが分かりました。(図 2)。

つまり、本研究は「患者の全身状態を改善すること」が長期生存につながる可能性を示した研究といえます。

図 1 無増悪生存期間および全生存期間

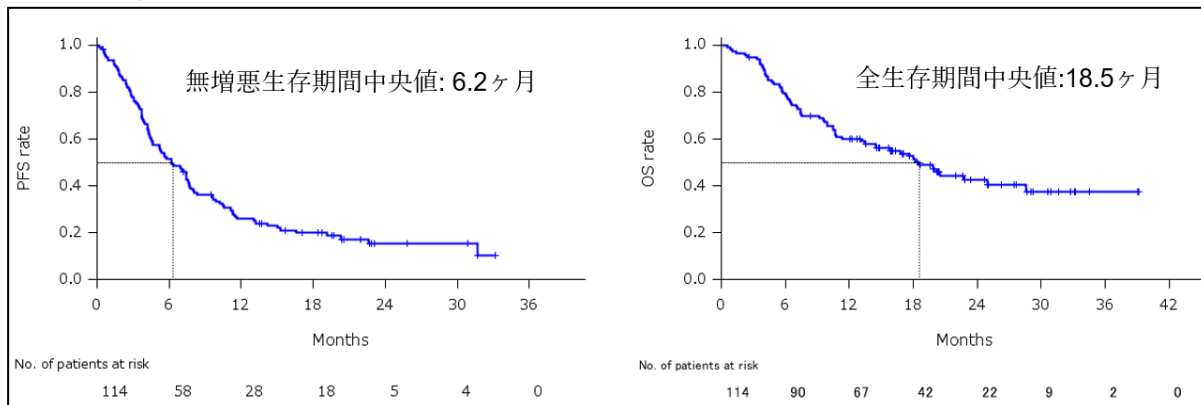
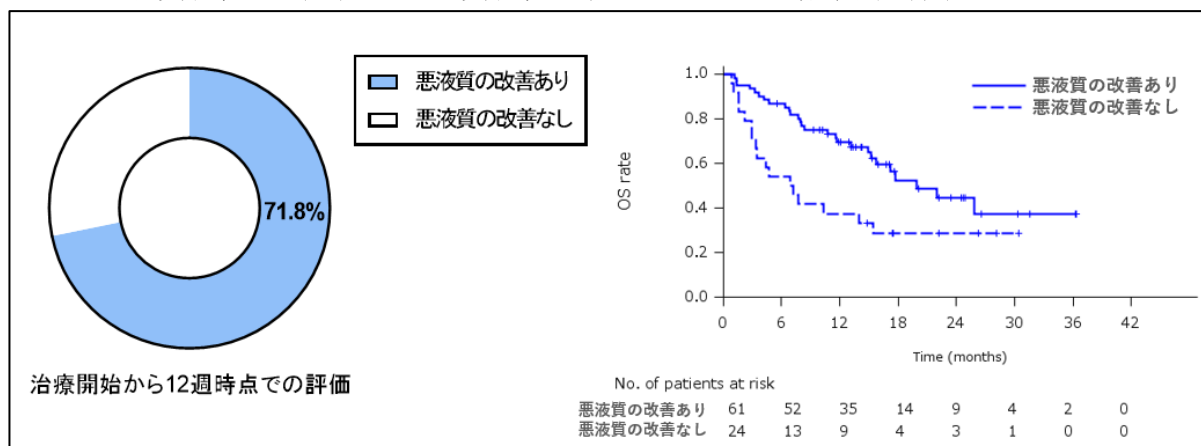


図 2 悪液質改善率（左）と悪液質改善の有無による全生存期間（右）



3 今後の展開と社会へのアピールポイント

これまで肺がん治療では、「がんを小さくすること」や「がんの進行を抑えること」が主な治療目標でした。

今回の研究では、それに加えて「がん悪液質を改善すること」が患者の予後に深く関係していることを、全国規模の前向き臨床研究で初めて示しました。

この成果は、悪液質治療を単なる支持療法ではなく、患者の生命予後にも関わる重要な治療として位置付ける可能性を示すものです。今後は、肺がんだけでなく他のがん種においても、悪液質の改善を新たな治療目標として取り入れた研究や治療戦略の発展につながることが期待されます。

＜取材等に関する事＞

京都府立医科大学事務局 企画課企画広報係

電話：075-251-5804

E-mail：kouhou@koto.kpu-m.ac.jp